2Tp－5

大正中期～昭和初期における生活改善運動の展開と成果
－洋装化を手がかりとして－（第２報）

○共立女大家政　奥田都子　　久留米信愛女学院短大　岡部千鶴

【目的】本報告では第１報に引き続き生活改善運動をとりあげ、服装改良への取り組みと洋装化を手がかりに、運動の展開とその成果を明らかにするとともに考察を行う。

【方法】生活改善運動に関連する大正～昭和戦前期の新聞･雑誌･教科書その他の文献資料の調査・分析を行い、服装改良、洋装化に関する記述を中心に考察を行った。

【結果】①生活改善運動のなかで、服装改良を呼びかける提唱者・推進者の理念は、おおむね婦人解放、経済的合理性、機能性追求の３点に集約される。②経済的合理性の面から洋装を唱える推進者には、自ら簡易服の考案や製作・販売を行う者も多かった。この活動に呼応するように洋装業界も既製服の販売に乗り出し、安価で簡易な洋服が次々と工夫され供給された。③経済性と並び、洋装化を奨める大きな理由として常に挙げられたのが、機能的合理性である。すでに明治から男性の職業服として洋服の採用は行われていたが、大正期生活改善運動は、機能性の観点から、子供や勤労婦人・学生への洋装を提案した。④また、家庭婦人に対しては、経済性・機能性抜群の簡単服（アッパッパ）と呼ばれる家庭着を奨め、庶民生活における生活改善の浸透を図った。この簡単服は伝統的な審美眼を遵守する文化人やマスコミの非難を集めたが、女性たちの圧倒的な支持を前にして、それらの批判はほとんど力をもたなかった。⑤このように、生活改善運動は洋装化を通して生活の合理化を進めた。それは、人々の中に生活の合理化という観念を培い、古い因習や社会慣習に盲従するのでなく、合理性の追求という視点から生活を問い直そうとする気運につながった。